

## Ⅱ ボランティア活動報告

### 松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト平成23年度活動報告 絆を育み、長期支援を！ ―地方大学のできる支援を模索して―

尻無浜博幸・松田千壽子

#### 〈 目 次 〉

1. 被災地のニーズにあった支援活動を目指そう ―活動の目的と概要―
  - (1) 先発隊の活動
  - (2) モデル「松本大学方式」を作ろう―本学のコンセプトにあった支援のあり方を模索して―
2. 生活環境を整える（4月～7月までの活動）
  - (1) 地域丸ごと支援 ―大街道小学校区の瓦礫撤去作業支援―
  - (2) 一日も早い学校再開にむけて ―大街道小学校校舎清掃―
  - (3) 「One Day 弾丸ツアー」の実施
3. 心のケア ―通年のカウンセリングと8月サマーキャンプ―
  - (1) カウンセリング
  - (2) 松本大学サマーキャンプ
  - (3) 学習支援
  - (4) 東日本大震災「心の支援」研修会
  - (5) 被災地へ花を！
4. 学生はどう育ったか
  - (1) 地域での事例発表
  - (2) 大学祭での問題提起 ―シンポジウム―
  - (3) 第1回つながる高・大交流フェスタの開催
5. 今後の活動と課題
  - (1) 大街道小学校からの要請
  - (2) 産業復興をどう支えることができるのか
  - (3) 活動資金調達
  - (4) 学生のボランティア活動をどのように評価するか

#### 資料

- (1) 平成23年度活動報告
- (2) 平成23年度会計報告
- (3) 新聞掲載一覧



## 1. 被災地のニーズにあった支援活動を目指そう ―活動目的と概要―

平成23年3月11日（金）未曾有の大震災が起り、さらに、追い打ちをかけるように福島原発の問題が発生した。次々とテレビに映し出される悲惨な状況を目の当たりにしながら、「何かしなければ、何か自分にできることはないか」という衝動に日本中が突き動かされていた。

松本大学の教職員・学生も例外ではなく、災害発生直後から自然発生的に何か被災地の手助けができないだろうかという機運が高まり、ほぼ一週間を経過した頃、皆の思いが形となって現れた。しかし、あまりの被害の大きさに、交通網の寸断等、現時点で闇雲に現地へボランティア活動に入ることはかえって被災者の方々にご迷惑ではないかと判断し、3月中は、ボランティアが効率よく活動できる状況になるまで、準備をしながら待つことになった。

4月に入り、被災地の交通事情等も徐々に改善されつつある状況を確認した上で、松本大学、松本大学松商短期大学部（以後松本大学で統一）の教職員・学生の有志からなる「松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト」を立ち上げ、4月5日（木）に初めての会合を開いた。この会合で、支援活動の基本方針、支援に入る被災地、支援内容、支援のための資金調達などが話し合わせ、まずは、先発隊を現地へ派遣して被災地の状況把握をすることになった。

### 1) 基本方針

- ①本学は地域貢献をコンセプトにしている大学であるので、一つの地域を対象として、しかも教育機関としての持ち味を活かした支援を行う。
- ②支援活動は単発で終わらず、長期にわたり、信頼関係を築きながら行う。
- ③活動を展開する基本的な考え方は、ボランティア活動（教職員は有休扱い、学生はこの活動は単位にせず、教授会の申し合わせとして「授業を休んだ場合は欠席扱いとしない」ということになった。具体的な対応は各授業担当者に委ねられた）として実施する。
- ④教職員と学生は可能な限り対等な立場で関わる。会合には学生も参加して自由に意見を述べる。

### 2) 支援に入る被災地

効率を考えて、土地勘のある（出身者のいる）地域を選択。宮城県石巻市と決定した。

### 3) 支援内容

- ①基本的に、被災地のニーズに応じた活動を行う。まず、先発隊を派遣して現地のニーズを把握した上で具体的な支援内容を検討する。
- ②地域との連携・地域貢献を目指す松本大学として、今までのノウハウを活かし、学生と共にできる支援活動を検討する。
- ③教育機関としてどのような支援をすることができるか検討する。

### 4) 資金調達

ボランティアとしての活動であるから、必要な費用は各自が賄うことで了承した。

後日談であるが、ひとつの小学校を基点にその小学校区を丸ごと支援にすることになり、資金調達の必要性に迫られた。本部担当であった教職員を中心にプロジェクトのメインメンバーが資金獲得のために奮闘することになった。

#### （1）先発隊の活動

先発隊は（プロジェクト代表の尻無浜博幸准教授、プロジェクト活動部隊リーダー木村晴壽教授、川島均准教授、中山文子専任講師（臨床心理士）の教員4名とボランティア希望の学生代表3名）、報道等による現地の惨状から野営を計画し、テント、簡易トイレ、食料等、何も現地で調達する必要のないようにすべて準備した上で本学のバスにて出発した。

#### 1) 4月14日（土）到着当日―野営場所の確保―

まず、はじめに現地のボランティアセンターや行政と連絡を取り、野営場所の確保を行った。宮城県石巻市の多目的施設（遊学館）に幕営許可をとり、寝食の場とした。

この施設は要介護者の避難場所となっていた。また、1、2週間後には自衛隊の幕営地となる予定であった。さらに建物の周囲一体は大きな空きスペースがあり、大量の支援物資がブルーシートをかぶせた状態で山積みになっていた。

## 2) 2日目ー小学校との接触ー

はじめに、市街地を回り、南浜町・中瀬・湊の各地区を一望できる日和公園に登り、想像を遙かに超える悲惨な現状に言葉を失った。

次に、予め対象校として絞った大街道小学校、釜小学校、中里小学校を訪問した。大街道小学校では、校長に会うことができ、本プロジェクトの意向を伝え、教職員間で相談してもらうことになった。また、次回の訪問の際に、校庭内に野営をする許可を得た。他の2校は、責任者不在で、学校側と具体的な話をする事ができなかった。

## 3) 3日目ーボランティアセンターとの接触ー

石巻専修大学内におかれた、被災者支援のボランティアセンターにて、当センターの活動・機能とボランティアの動きを把握した。当センターは、地元ニーズとボランティアをマッチングさせるコーディネート機能をはたしていた。そこで、我々もボランティアセンターを通じた支援活動を実施することにした。臨床心理士1名（教員）は医療関係者と避難所へ、その他は大街道地区の民家で調査目的を兼ねて、泥だし・瓦礫撤去の支援活動を行った。

## 4) 4日目ー石巻市行政に関する調査ー

最終日である4月17日（火）は行政の動向を把握するために石巻市役所を訪れた。全国各地の自治体から派遣された行政職員とも話を聞くこともできた。ここで得た情報は、松本市にも伝えた。また、教育委員会からの具体的な説明も聞くことができた。

## 5) 今回の調査で分かった問題点

①支援物資が必要な人々に届かず、滞っている。また、支援物資が必ずしも被災地のニーズにあっていない。②被災者が当センターへ依頼を出さないケースがある。③ボランティアの希望と現地で必要な作業が異なりロスがでている。④作業現場まで行くのに時間がかかりすぎる。⑤現場での作業時間が十分に確保されていない。⑤教育委員会も教育現場（小学校）も混乱しており、4月21日からの小学校再開に向けて対応に追われている。

— 4月14～17日（木～日） 宮城県石巻市の状況 —

### ①野営地の確保



### ②先発隊が作業をした民家の様子



## ③大街道小学校区の様子



## ④南浜町



## ⑤門脇小学校



## ⑥日光山から見た中瀬



## ⑦日光山から見た南浜町



## ⑧避難所の様子



## ⑨石巻市のボランティアセンター受付



## (2) モデル「松本大学方式」を作ろう—本学のコンセプトにあった支援のあり方を模索して—

松本大学では「地域と共に学生を育てる、地域丸ごとキャンパス」という考えのもと、地域連携により学生を育てる取組を行ってきた。地域のニーズを把握し、信頼関係を築きあげながら地域の問題に学生と共に取組み、地域と共に育つという考え方で、地域との絆づくりを行っている。当ボランティアも松本大学のこの方針に沿って、今まで培ってきた地域づくり・地域連携のノウハウをもってボランティア活動に当たることを参加者の共通認識としていた。「地方の大学として、どのような支援ができるのか」という問題意識を持ちながら、地域（被災地）のニーズを最優先とし、自己満足に陥らないボランティア活動を目指し、一つの地域を長期的に支援することとした。つまり、「顔の見える支援」により被災した人々に信頼してもらえる活動を行い、その地域に必要とされる支援を学生と協力して行う。そして、最終的には「松本大学方式」といえるモデルを作ることができればとの考えのもと活動を続けてきた。そのキーワードは、①一つの地域を継続的に、②地域のニーズに沿って、③顔の見える支援、である。

本プロジェクトのこのような基本的な考え方及び支援活動については、『東日本大震災と大学による「地域丸ごと支援」の実践—災害後の地域再生に向けた定点支援』（当プロジェクト活動部隊リーダー・総合経営学部長 木村晴壽（教授））という論文にまとめられ、事例研究報告として地域活性学会発行『地域活性研究 Vol.3』（2012年3月）に掲載されている。

## 2. 被災地の生活環境を整える手助け（4月～7月までの活動）

### （1）地域丸ごと支援－大街道小学校区の瓦礫撤去作業支援－

夏までは、「地域丸ごと支援」の考え方に沿って、大街道小学校区の個人宅や同区内の道路の泥だし、瓦礫の撤去作業を中心にボランティア活動を続けてきた。

瓦礫撤去・泥だし作業等は効率的に作業を進めるために、5～6名を1班として作業にあたった。原則として週1回、3泊4日を基本とし、1回の派遣数を教職員（1～3名）と学生1～2班（5～12名）とした。出発時間は学生の授業終了時間を考慮して決めたが、帰りは15時30分までしっかり作業を行い、遅くも16時に石巻を出発するというハードスケジュールであった。

瓦礫撤去・泥だし作業は、7月まで実施した。先発隊の作業を含めて派遣回数は14回、作業日数は延べ52日間であった。参加者は延べ人数で学生（学部生、短大生含む）119名、教職員36名、合計157名、男女を問わず重い瓦礫や泥出しを泥まみれになりながら実施した。この期間中に実施した本学独自の支援活動「One Day 弾丸ツアー」をこの後、「（3）「One Day 弾丸ツアー」」で紹介したい。

日頃キャンパス内では、なよなよしている女子学生も男子学生顔負けの活躍ぶりで「先生、私たちも、やる時はやるのよ」と自慢げに言った言葉が印象的であった。



4月16日（土） 2階50坪のところまで津波で家がつかったお宅で、瓦礫の撤去作業をする教員と学生たち。この時は、震災後1ヶ月が過ぎたころであり、この地区は、あちこちの家が同じような状況であった。このお宅は2階で生活をしており、少しずつ家族で片付けをしているところをサポートした。（石巻市大街道南5丁目）

### （2）一日も早い学校再開にむけて－大街道小学校の整備－

先発隊が事前調査に大街道小学校を訪れた段階で、すでに教育委員会から4月21日に小学校再開の方針がだされており、それに向けての動きがあった。しかし、大街道小学校の場合は21日授業再開に間に合う状態ではなかった。学校自体が被災し、校舎も体育館も一階部分が浸水したために被災者は2階以上の教室で避難生活をしてきた。まず、避難者に体育館へ移動してもらうためには、体育館の清掃が済まなければ移動はできない。結局、体育館の清掃は教育委員会の要請で自衛隊に委ねられた。

学生たちは、被災者が教室から体育館へ移動するための準備を手伝うことになった。校舎の廊下に置かれた大量の物資や避難所で必要となる数々の物品を教室から体育館へ運搬した。また、体育館のフロアにマットを引き詰め、パーテーションを設置するなどの体育館内を整える作業を行った。最後に、被災者が移られた後の校舎を片付け、清掃するなど授業再開の準備に携わったのである。



4月29日（金） これまで小学校の教室が避難所になっていたが、学校再開に伴って避難所が小学校の体育館へ移動した。被災者が移られたあとの校舎を片付け、授業再開の準備に携わる教職員と学生たち。（大街道小学校）

### （3）「One Day 弾丸ツアー」

短期集中型で、ボランティアを希望する学生を多数投入して支援作業を行う方法として「One Day 弾丸ツアー」を実施することになった。震災後一ヶ月を経過しても瓦礫撤去・泥だし作業は、遅々として進まず、できる限り早く生活環境を整えたいとの現地のニーズに応える形で、集中して

被災地の瓦礫撤去・泥だし作業を行うことにした。一方、学生もボランティアをしたいのだけれど、講義もあり、長期間の参加は難しいとの意見が多数あり、双方の要望を満たす形で考え出された方法がこのツアーである。

この3日間実施されたツアーには、教職員18名（内カウンセラー・保健師6名）、学生70名、計88名、ドライバーが1回2名で計6名が参加した。このうち、教員3名、学生4名は5月22日より現地に泊まり込み、受入の調整を行った。

### 1) スケジュール

今回、支援活動日前日の20時に大学を出発した学生はバスの中で眠り、翌日の朝7時に現地到着。7時30分から1日泥掻きや瓦礫撤去作業を行い、その日の16時に石巻から松本へ。夜中の零時に松本大学で解散というハードな日程であった。

- 第1弾： 5月24日（火） 20:00 松本大学集合・出発  
 5月25日（水） 作業 約7時間 学生17名、教職員5名  
 5月26日（木） 零時 松本大学解散
- 第2弾： 5月25日（水） 20:00 松本大学集合・出発  
 5月26日（木） 作業 約7時間 学生26名、教職員4名  
 5月27日（金） 零時 松本大学解散
- 第3弾： 5月26日（木） 20:00 松本大学集合・出発  
 5月27日（金） 作業 約7時間 学生24名、教職員6名  
 5月28日（土） 零時 松本大学解散



「One Day 弾丸ツアー」は一日だけボランティア活動（瓦礫撤去・泥だし作業）を行う。労働時間は7時間、当時の劣悪な状況を考えると過酷なツアーであった。授業を出来るかぎり休まずに、学生の「復興作業に協力したい」という思いを叶えるには、この方法しか選択の余地がなかった。

### 2) 事前準備

現地受入をスムーズに行うために、事前に本プロジェクト（松本大学災害支援ボランティア団体）の代表及び活動責任者が現地のニーズを調査し、現地の片付けを希望する被災者（受け入れ先）と打ち合わせを重ね、調整を行い、受入体制を整えた上での実施であった。学生が現地入りするまでに、瓦礫撤去に入る家を選定、人員の割り振りも決めておいたため、順調であった。

一方、学内では、学生及び教職員に告知し、希望者を募った。メンバーが決定した段階で、参加者向けオリエンテーションを実施。ボランティア活動の専門家が学生及び教職員へ事前指導を実施した。

当日は、プロジェクトのメンバーと引率の教職員が協力して、混乱を招かないように、また事故の起きないように配慮した。

大型バス・中型バスを利用して、石巻大街道小学校まで3日間、学生のピストン送迎を実施した。ドライバーは夜中走るため2名体制で6名に依頼した。

### 3) 瓦礫撤去・泥だし作業

数人のグループで4軒～5軒の家の片付けを実施した。1軒が片づくたびに次の家に移る。作業箇所が数カ所に分かれるため、連絡用の車を一台準備。各作業場所への連絡や、飲み水の補給、遠い作業場への学生の送迎等、幅広く利用した。

現地に到着した学生は、早速、松本大学後援会（保護者会）が用意した揃いのユニホームをはおり、5、6名のグループに分かれて、担当の作業場所へと向かった。各グループには、教職員あるいはすでに何回か現地で復興活動を経験している学生が同行し、作業



が順調に進むようリーダーシップをとった。

ボランティアに入った家は、大街道小学校の避難所にいる方々にヒアリングを行い、そこで要望を聞き、作業内容など事前に丁寧に確認してあったため、混乱もなく順調に撤去作業を行うことができた。しかし、瓦礫撤去作業は、想像を絶する作業であった。重い、臭い、汚い、そして何が埋まっているか分からない、大変で、過酷な地道な人海戦術を続けたのであった。

「もう家の片付けを諦めていたけど、学生の皆さんの瓦礫撤去が、片付けを始めるきっかけを作ってくれた」など喜んでいただけた。「松本大学効果」という言葉さえ生まれた。

#### 4) 休憩・昼食

水分補給と休憩は作業現場で行い、昼食は、大街道小学校敷地内にある松本大学本部に戻って、現地で調達したお弁当をいただいた。現地でお金を支払うことも復興協力の一部であるとの考えのもと、現地で購入できるものは出来る限り現地で買うこととした。

学生たちは、体に染み込んだヘドロの悪臭と蠅に悩まされて食が進まず、経験者から「食べないと、体がもたない」と叱咤激励され、何とか食べていた。昼休みに、改めて周囲を見回し、言葉も出ずに茫然と見つめる学生達の姿が印象的であった。

#### 5) 作業道具

当時は現地での調達は不可能であったため、瓦礫撤去に必要な道具は、すべて松本から持参した。一輪車、鋤簾、シャベル、ロープ等の他、学生の長靴用の杓引き、ゴム手袋、マスク等基本的にはすべてを持参したのである。特に土のう袋は、何枚有っても足りない状況であった。毎回、松本から500枚程持っていった。



15時30分、作業終了、帰り支度にとりかかる。16時に出発するためには、後片付けや着替えを手際よく行わなくてはならない。悪臭が身に付けているものすべてに付くため、全員が着替えを行い、作業着はナイロンの袋に封じ込めて松本へ持ち帰った。

なお、今回作業用に新たに購入した道具は、そのまま松本大学の防災用の道具として使用することになっている。

#### 6) まとめ

今回の活動は、学生にとってはハードスケジュールであったが、1日だけということで参加しやすく、多くの学生がボランティア活動に参加することができた。学生の黙々と作業する姿は、キャンパス内でみかける姿と大きくことなり、逞しささえ感じた。学生にとっては、大変貴重な体験であったに違いない。

3日間で、約15軒の個人宅の片付けと周辺道路の溝の泥掻きを含めた清掃を行うことができた。しかし、現地のニーズは三日間では当然充足されるものではなく、もっとボランティア支援が必要であった。今回の弾丸ツアーは、あくまでも短期集中的な処置であり、その後の瓦礫撤去活動は、今まで実施していた定期的に現地を訪れ、作業に当たる形で継続したのである。

また今までの本プロジェクトは、現地ニーズを優先して支援活動に取り組んできたが、今回は結果として、学生の希望を優先した形となった。しかし、学生の活躍は、現地の人々に受け入れられ、高く評価されたようであった。

尚、この活動には公益財団法人大和証券福祉財団の災害支援補助金が充てられた。

#### \* 瓦礫撤去・泥出し作業に参加した教職員

本プロジェクト代表・尻無浜博幸准教授、本プロジェクト活動部隊リーダー・木村晴壽、本プロジェクト事務局責任者・小倉宗彦大学事務局長、本プロジェクト物資調達責任者・白戸洋教授、林昌孝教授、増尾均教授、室谷心教授、犬飼己紀子教授、矢崎久准教授、益山代利子准教授、畑井治文准教授、廣瀬豊准教授、川島均准教授、中澤朋代専任講師、佐藤哲郎専任講師、中島節子助手、脇本澄子保健師、臼井健司庶務課長、田中雅俊係長、松澤久由主事（順不同）



### 3. 心のケア ー通年のカウンセリングと8月サマーキャンプを中心にー

#### (1) カウンセリング (通年)

先発隊を派遣した時点で、メンバーに臨床心理士を加えて、現地の状況を専門家の目で確認し、カウンセリングの必要性を痛感した。先発隊に参加した学生たちも調査や瓦礫撤去作業の合間に、児童たちとの遊びを通して触れ合い、心のケアの必要性を感じるところが多かったようである。

実際に大街道小学校児童の心のケアを目的としたカウンセリングを始めたのは、5月8日の第4次派遣からであった。小学校から部屋を提供してもらい、そこで大学の臨床心理士や社会福祉士、産業カウンセラーが対応することでスタートを切った。古林康江スクールカウンセラーと中山文子臨床心理士(短大部専任講師)を中心にその他の教職員や学生も交え、7月からは月2回を定期的に、平成24年3月までカウンセリングを実施した。学生は児童たちの遊び相手や学習指導に当たることで児童たちと仲良くなり、カウンセラーの手伝いをする事ができたようである。

#### 1) 活動内容

以下の①～⑨までの活動を実施した。

- ①資料提供『危機介入の実際』『ハイリスク要因児童、教職員見取りと対応』『ストレスマネジメント児童、教職員用』『児童(紙芝居&絵本)、保護者への即日反応への対応』『発達障害を持つ子へ対応』etc.
- ②児童、保護者への個別相談
- ③教員へのコンサルテーション & リラクゼーション
- ④授業参観及び観察(小1～6年生、支援学級訪問)
- ⑤不登校児童等家庭訪問(避難所)
- ⑥児童へのリラクゼーション・プレイセラピー(休み時間、放課後)
- ⑦サマーキャンプでの児童、保護者へ個別対応 & 学生も含め全体把握、付き添い etc.
- ⑧教頭、養護教諭との連携及び長期支援体制づくり(毎回報告、検討会)
- ⑨アンケート調査第1弾、2弾への協力 & 資料提供

#### 2) 主な相談主訴

登校不安・学習困難・友だち(人間)関係・余震不安・集中力の低下・食欲の低下・身内の死による気持ちの不安定・保護者本人の不安・教員本人の不安などであった。

#### 3) 月別相談件数

期間中に実施したカウンセリングの回数は27回であったが、内25回の報告は以下の通り。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	2回	4回	3回	4回	3回	3回	2回	1回	1回	1回	1回	25回
1 児童相談	28	10	2	6	4	1	2	1	1	1	1	57
2 教員相談	0	16	7	3	11	14	4	0	3	0	1	59
3 保護者相談	2	2	3	3	5	2	1	1	1	0	0	20
4 コンサルテーション	2	40	14	6	8	12	7	2	3	3	9	106
5 授業参観	0	6	3	2	4	8	12	4	4	4	4	51
6 リラクゼーション	0	6	10	0	0	0	0	0	10	9	0	35
7 アンケートに関する相談	3	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	8
8 資料提供	0	0	3	0	1	0	0	0	1	0	0	5
9 学生による心の支援	0	1	0	0	0	1	3	2	0	0	5	12
10 避難所・仮設訪問	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
合計	36	81	44	22	34	39	29	10	24	17	20	356

(古林康江スクールカウンセラー集計)

#### 4) 小学生と共に実施

11月には、大街道小学校の運動会やマラソン大会に本学の学生が招待され、カウンセラーと学生たちが石巻へ出かけた。児童と一緒に走ったり、食事をしたりと、交流を図った。

3月には、平成23年度最終カウンセリングの日に、《絆の木》を低学年の児童と本学学生とで作成した。一日で完成できるように、色画用紙を児童の好きそうな形に切り抜いてメッセージ記入用紙を準備、台紙も用意し松本大学の学生からのメッセージ50枚を持って出かけた。これは、本学カウンセラーの「絆療法」である。児童たちはメッセージを記入して、大学生のお姉さんお兄さんに台紙へ貼ってもらい、大喜びであった。



#### 5) 全体を通しての所見

##### ①古林康江スクールカウンセラー

当初、1年間計画的（今までの緊急対応）「時系列対応」により支援体制を組んでみたが今までにない進捗に毎回心が痛む状況であった。とにかく、1日でも多く伺い、少しでもお役に立てればという思いで夢中で1年が過ぎた。何もお役に立っていないのでは、あるいはお邪魔では等々思いつつの活動であった。今回、相談件数を集計してみて、様々な思い出の場面（テント生活・教室生活・避難所訪問・児童の相談の長い列・絆の木など何う度に絆が深まった・・・）が走馬灯のように浮かび多くの宝物を頂いたことに気付かされた。

##### ②中山文子臨床心理士（短期大学部商学科専任講師）

学校からの情報提供、現地の状況の把握がメインであったが、徐々に特定の生徒の相談が多くなっていった。避難所が開設されていた頃は、避難所に関しての相談もあった。継続的に支援ができたことで、先生方からの信頼が得られ、気楽に相談して頂けるようになった。約1年間、学校全体の安心のために貢献できたと思われる。

以上が、中心になってカウンセリングを行った両名の所見である。さらに、古林カウンセラーは次のような感想を述べている。

『被災された方々の気持ちにより添う』ということの重みを実感した。以下、児童・保護者・教職員に教えてもらったことである。一つは、コミュニケーションをとるときの温度差であり、情報、現況の把握等限りなく被災された方々に近づくよう努力することの大切さであった。もう一つは、同じスタッフによる長期的な関わり（絆、忘れない、行動する、継続）の重要さであった。5ヶ月目頃からお互いに信頼関係が深くなったように感じ、和やかでスムーズな相談活動が展開できた。

#### 6) その他

11月には3回にわたり、大街道小の子どもたちに信州の美味しいリンゴを届けた。カウンセラーの古林先生の手配で、旬のものをまるごと味わってもらい、力をつけてほしいという思いがあった。また、夏のキャンプ（2. 松本大学サマーキャンプ参照）に参加した子どもたちの「松本大学のお兄さんお姉さんにまた会いたい」という声にも応えるためでもあった。

最後に、今回のカウンセリング支援には、財団法人JKAの東日本大震災災害支援補助金を交通費に充当、長期にわたるカウンセリングを実施することができた。

## (2) 松本大学サマーキャンプ（8月）

4月から被災地に何回か足を運び、劣悪な環境の中で心に傷を負いながらも前向きに進もうとしている児童を見るにつけ、夏休みに児童たちを信州に招待して信州の自然の中で「美味しい空気をいっぱい吸わせてあげたい」という意見が学生や教職員の中から聞かれるようになった。そこで、資金繰りも考えずに児童と保護者、教職員をご招待することに決定した。7月中に学内での打ち合わせ会を何回か開き、また大街道小学校の教職員やPTAと連絡を取り合い、8月8日（月）から10日（水）まで、2泊3日で実施することになった。

サマーキャンプ実現に向けて、浅間温泉で被災者の宿泊を一手に引き受けて頂けたことや個人を含め、各団体から活動資金として寄付がいただけたことは、実現への大きな一歩であった。

### 1) 実施計画

今回の計画は、石巻市までのバスでの送迎、浅間温泉5ヶ所での2泊3日の宿泊とそのお世話をする学生の生活サポート、9日のグループ別活動（7つのプログラムに分かれての活動）支援、夕方の浅間温泉有志により実施されるミニ縁日などへの協力等を学生がメインになり教職員が手助けする形で実施した。

実施日：2011年8月8日（月）～10日（水）

参加者：大街道小学校：児童119名・保護者20名・小学校教員4名・同行看護師2名（計145名）

受入れ：松本大学 松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト

サマーキャンプチームに関わった学生、教職員は総勢200名

①本部 松本大学内 住吉廣行学長代行・木村晴壽学部長・小池以津美係長・地域総合研究センター

②送迎チーム 尻無浜博幸准教授、小穴悦子職員 送迎用バス 4台（本学のバスと平成交通のバス）

③生活チーム 白戸洋教授・尻無浜准教授・廣瀬豊准教授、畑井治文・中沢朋代・佐藤哲郎専任講師、古林康江カウンセラー、松田千壽子職員

※小学校1～3年、4～6年を分けて部屋割り&生活担当者を付けて25班に編成

宿泊先：浅間温泉 5カ所 浅間温泉梅の湯、浅間温泉栄の湯、浅間温泉香蘭荘、

浅間温泉尾上の湯、浅間温泉笹の湯西石川（宿泊人数173名）

④活動チーム（教員と学生で担当）

A 思いっきりスポーツ 斎藤茂・田邊愛子専任講師 学生16名 @松本大グラウンド

B おかし作り DE七夕 福島明美専任講師 学生15名 @松本大学地域づくり考房『ゆめ』

C トマト収穫と缶詰作り 矢内和博専任講師・門川由紀江教授 学生11名 @松本大学

D ニュースポーツのいろいろ 犬飼己紀子教授・大窄貴史専任講師 学生11名@松本大学

E 忍者も知らない路地裏探索 白戸洋教授 学生17名 @松本城周辺

F 岩登りに挑戦&森の探検 吉田勝光教授・中島節子助手 学生7名 @アルプス公園

G どうぶつとあそぼう+しぜんのふしぎはっけん 中沢朋代専任講師 学生10名 @アルプス公園

⑤浅間温泉歓迎縁日チーム 白戸洋教授・白戸ゼミ・浅間温泉組合 8/9夜開催 出し物、交流など担当

### 2) 実施報告

【前日／8月7日】迎え 松本市→石巻市

12時30分 バス4台で、教職員2名、学生11名が大街道小学校へ（20時頃石巻市大街道小学校着）。大街道小学校会議室にて泊。

【1日目／8月8日】移動日 石巻市→松本市



7時 児童の健康チェック（6時30分より）終了後、大街道小学校出発。

宮城県—福島県—新潟県—長野県の約9時間のバスの旅。車中では、児童が退屈しないように、学生たちが松本のガイドやビンゴゲームなど、工夫をこらして楽しい旅の雰囲気づくりに努めていた。



17時30分 全員、車酔いもせず元気な浅間温泉に到着。全体で、明日からのスケジュールを確認後、生活サポート担当（生活班）の学生の案内で各旅館へ。

生活班の学生の役割は浅間温泉滞在中の児童の生活サポート。

18時30分 夕食。ゆっくり温泉で旅の疲れを落として、明日に備えた生活班の学生たちは、興奮してなかなか眠らない児童たちの世話を根気よく行っていた。



【2日目／8月9日】サマーキャンプ・浅間温泉縁日

7時40分 松本大学が企画したプログラム推進を担当する学生（活動班）が松本大学を出発。

浅間温泉へ。浅間温泉にて、生活班の学生から児童を引継ぐ。

8時20分 7つのプログラムに分かれて活動。活動班の引率で児童たちは、浅間温泉を出発。A～G班に分かれて活動開始。

A班 「思いっきりスポーツ！」 松本大学総合グラウンド  
大学生相手にサッカー三昧。

B班 「“おかし作り” DE七夕」 松本大学地域づくり考房『ゆめ』  
「地域づくり考房『ゆめ』にて、女子学生とお菓子づくり。七夕飾りを作って、出来上がったお菓子を食べながら茶話会。短冊には復興への願いを込めていた。

C班 「トマト収穫とミートソースの缶詰作り」 新村トマト畑・松本大学6号館  
トマト畑でトマトを収穫。収穫したトマトを使ってミートソースの缶詰作りに挑戦。完成した缶詰は家族へのお土産となった。

D班 「ニュースポーツのいろいろ」 松本大学第1体育館  
大きな体育館でニュースポーツ体験。初めてのスポーツに皆で挑戦。

E班 「ぶらり城下町」 国宝松本城・松本旧市街地  
市街散策、松本城の天守閣にも登りと城下町を満喫。案内役は松本大学の学生。

F班 「森の探検&岩登りに挑戦！！」 アルプス公園

G班 「どうぶつとあそぼう+しぜんのふしぎはっけん」 アルプス公園  
アルプス公園（F班・G班）では、大学生が児童たちの遊びの手伝い。岩登りや動物たちと触れ合い、笑顔が溢れていた。広い芝生を走り回る児童たち、学生も教職員も童心にかえり、一緒に遊んだ。

A班



B班



C班



D班



E班



## E班



## F班



## 昼食



## 午後の活動



## ドリームコースター



12時

アルプス公園にて、ご当地グルメの山賊焼きや信州の美味しい野菜と果物の昼食。昼食のお世話係は、ソフトボール部の学生29名が担当した。参加者全員が公園に集合し、青空の下でみんな一緒に昼食。地域の人々が提供してくれた山賊焼きや信州の新鮮野菜とおにぎりに児童たちは「おいしい」と歓声をあげていた。

午後

児童たちは、アルプス公園で過ごし、保護者と引率の先生方は、温泉を楽しむ班、城を見学する班（教職員2名案内）など、さわやか信州を満喫したようであった。最後に、児童全員で「ドリームコースター」を体験。学生たちと仲良くなった児童たち、笑顔が輝いていた。

18時30分

夕食後、浅間温泉ミニ縁日。お手伝いは、縁日担当の学生や教職員。

～20時

ミニ縁日は、浅間温泉の皆様の企画で、地域の有志の皆様多数にご協力頂き、実施することができた。スイカ割り、射的、ヨーヨー釣り等、児童たちは、全員参加。楽しい一時となった。最後に、本郷小学校の皆さんや松本大学生と一緒に「松本ぼんぼん」を踊り、終了となった。

ヨーヨーつり。スイカ割り。割ったスイカ、美味しい！ 櫓の周りでぼんぼん踊り



【3日目／8月10日】移動日 松本市→石巻市

8時20分 浅間温泉お別れ会。「浅間女将さんの会」の皆さんも法被姿で参加。

9時 松本大学お別れの会。松本商工会議所青年会メンバーも参加。全員で記念写真撮影。

10時30分 30分遅れで、松本大学を出発。教職員2名、学生13名が石巻大街道小学校まで同行。車中では、学生たちが児童の面倒を最後までしっかりとみていた。思い出を話しあったり、DVDを見たりしながら帰途についた。

19時頃 無事に大街道小学校に到着・解散。本学の教職員と学生は、大街道小学会議室にて泊。

【後日／8月11日】送り 石巻市→松本市

6時大街道小学校発、15時頃松本大学へ到着。



8月10日朝。前日の夜、旅館で「帰りたくない」「時間がもったいない」と学生たちと夜更かししていた児童たちでしたが、全員元気で浅間温泉の皆さんとお別れの会に参加。松本大学では、全員で笑顔の集合写真。元気で頑張ること、そして再会を約束して学生からのエール。「また、松本に遊びにおいでね」のメッセージを込めた、手づくりの木製ブローチを児童に手渡す学生たち。出発間際、泣き出す児童たちもいて、大学生も涙ぐみながら、「またね!」「元気でいるんだよ!」と最後までつないだ手を放そうとせずに、別れを惜しんでいた。松本大学の学生や教職員に見送られて出発する4台のバス。夜7時頃には、全員無事に石巻大街道小学校に到着し、家路についた。

後日、参加していた児童たちや、一人で松本大学へ子供を送り出したお母さんからお礼の手紙が届いた。松本大学の総力を挙げて実施したサマーキャンプは、被災地への大きな贈り物となったようである。

また、サマーキャンプの期間中は、学生たちの活躍に目を見張った次第である。

### 3) 地域の協力により実現した松本大学サマーキャンプ —協力者ならびに活動資金援助者の一覧—

今回のサマーキャンプは大勢の地域の方々の協力により、成功することができた。

活動資金についても、各種団体および大勢の地域の皆様、大学の学生たち、教職員等からの寄付により賄った。ここに掲載し、お礼に代えさせていただく。松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト一同、心よりお礼申し上げる次第である。

#### ・協力・援助者

浅間温泉にそばの花を咲かせる会、竹渕農場、浅間温泉観光協会、浅間温泉町会連絡協議会、浅間温泉まちづくり協議会、浅間温泉ゆめ市、浅間温泉旅館協同組合、浅間温泉旅館協同組合婦人部、アトリエMOO、かまくら屋、山賊焼を考える会、松本ハイランド協定施設連絡協議会、JA松本ハイランド、中小企業家同友会浅間部会、本郷地区子ども会育成会、(有)本郷鶏肉、ホットプラザ浅間、浅間温泉梅の湯、浅間温泉栄の湯、浅間温泉香蘭荘、浅間温泉尾上の湯旅館、浅間温泉笹の湯西石川、山形村社会福祉協議会、梓川高等学校、大街道小学校、松本青年会議所、松本ゾンタククラブ、エクセラン高等学校、(株)アマック、(株)テレビ松本ケーブルビジョン、松本大学生協同組合(敬称略・順不同)

#### ・活動資金提供団体および寄付を頂いた地域の皆様

公益財団法人日本財団(災害復興支援補助金)、松本市、ライオンズクラブ国際協会、松本観光コンベンション協会、信濃俳句通信、松本東ロータリークラブ、松本商工会議所、ものづくりフェア実行委員会、松本ロータリークラブ、松本空港ロータリークラブ、市民タイムス、松本田川小学校PTA、新村公民館、松本西南ロータリークラブ、TOY BOX、松本大学同窓会、松本大学学生、松本大学教職員、一般の皆様からの寄付(敬称略・順不同)

尚、個人の皆様のご氏名は、個人情報等の関係から割愛したことをご了承願いたい。

### (3) 学習支援(5月~7月)

被災者からの要望で、5月11日(水)の第6次派遣から松本大学の教員と学生が避難所にいる被災者の学習指導することになった。避難所生活では消灯時間が決っていることなどから十分な自己学習ができない状況にある。小学校の一教室を借りて、九九の暗記から高校生の受験の準備に至る内容に対応してきた。小学生は学生が面倒をみて、高校受験を控えている中学生や高校生については、林昌孝教授を中心とした教員がフォローした。どうしても途切れ途切りの学習指導にならざるをえないことが気がかりではあったが、その時できる最善を尽くすことにして指導にあたった。この学習支援は、大街道小学校に避難所が設けられていた7月まで続けた。中止したのは、被災者が

仮設住宅に移られた時点で、学習指導の時間を取ることが難しくなったことに由来する。



5月13日（金） 避難所で生活をしている子どもを対象に学習支援をはじめ。避難所生活をしている親からの求めであった。高校生の少しハードルの高い学習支援は林昌孝教授が担当し、小学生の部は学生が対応した。（大街道小学校）



#### （4）東日本大震災「心の支援」研修会（24年3月）

松本大学プロジェクトチームとして継続的に石巻市にて子ども達の支援を行ってきた古林・中山両カウンセラーの呼びかけにより研修会を開催した。震災1年目となるこの3月25日、大震災を体験された医師宮城秀晃先生を講師に研修会を開催し、災害時の支援について地元の皆様と共に考えることを目的として実施した。（財団法人生協総合研究所生協総研賞「助成事業」補助金にて実施）

午前の部は、「地域の人々に寄り添い、共に歩んだ一年間～精神科医としての経験から伝えたいこと～」というテーマで、宮城秀晃先生に講演をお願いした。先生は宮城県石巻市中里にある「宮城クリニック」院長で、精神科医である。3月11日は建物1階が浸水し、2階で職員・利用者・近隣住民と共に救助がくるまでの4日間を過ごした。日ごろのデイケアメンバー同士の協力や役割分担が活かされ、孤立した環境であっても混乱することなく無事全員が救助された。その後、先生は石巻市に心のケアチームを立ち上げ、専門スタッフらと被災者の支援にあたっている。9月に全国ネットで先生の活動の様子がTV放映され、反響を呼んだ。また、10月に実施した本学の大学祭でも、学生の依頼に応じてご参加頂いた経緯がある。

宮城先生は、講演で、仮設住宅の生活が続くこれからが精神的な孤立や自殺の問題が顕在化する時期であると、対策の必要性を強調されていた。

午後の部は「専門性を行かせる支援と事前対応について」というテーマで、事例をもとに震災時の心理状態や、その時々求められる支援についてシンポジウム形式で話し合いを行った。対象は、医療・教育・福祉・心理領域に関わる専門家の方、行政の方、及び専門資格取得予定の学生とした。

シンポジストには宮城秀晃先生の他に、穂高東中学校校長太田壽久氏、中信松本病院小児科医長石田秀一氏、松本保健所補佐保健師伊藤有子氏の計4名をお願いし、古林康江カウンセラー・中山文子臨床心理士が司会を務めた。

昼食時には、松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトの活動を映像で紹介し、尻無浜ゼミ生が被災地での支援体験をもとに説明を行った。

#### （5）被災地に花を！

##### 1）復興ひまわりーひまわりプロジェクト報告

津波で家が浸水し、学生たちが泥かきや瓦礫撤去を行ったお宅へ、ひまわりの種をお届けした。この種は、松本大学近郊の休耕田を利用して学生たちが育てたひまわりから取った種である。

半信半疑で撒いた種であったが、8月に見事に花を咲かせた。大街道地区もだいたい寂しさが目立ったが、家々の周辺に植えてあるひまわりは、そんな中でも青空に向かって大きく花開いていた。その中の岡田さん（2軒目）は、「こんなに咲きました！」とわざわざ手紙でご報告下さった。

8月上旬の様子



9月上旬の様子



## 2) 心のふれあいー花いっぱい活動

24年3月、「復興半ばの被災地を花で明るくしよう」と尻無浜ゼミの学生が発案し、湾に面した集落が津波で壊滅的な被害を受けた石巻市の雄勝地区を中心に花を植える計画をたてた。



松本大学の卒業生の計らいで、松本市のエクセラン高校と塩尻市の塩尻志学館高校の生徒たちが育てたパンジーなど計150個の花を無償で提供していただき、3月18日早朝松本を出発し、3泊4日の予定で石巻市の5カ所へ花を植えて、ボランティア活動を実施した。

また今回は、本学と交流のある台湾の福祉団体、八福生活発展協会の障害者を含む27名が同行し、学生や被災者と共に花を植え、台湾の歌を披露するなど地元の被災した皆さんと国を超えた交流を行った。学生にとって、台湾の障がい者団体を被災地に案内できたことは、ボラン・ツーリズムの実現でもあった。これまでボランティアで関わった地域限定のネットワークを活かし、被災者の生の声を聞き、現実になにが起こったのか被災者から解説していただいた。その橋渡しからツアー企画、実施を学生が自分たちで行った。学生と被災者との信頼関係ができていたので、その意味を海外の方へ還元することができたと考えている。

## 4. 学生はどう育ったか

震災後3ヶ月が過ぎた頃、被災者は不自由な避難所暮らしから解放され、徐々に仮設住宅への移り住みが始まった。このことは、これまで全て生活物資は配給されお金がかからない暮らしから、自分でお金をだして生活することを意味していた。そんな状況を現地に通いながら見ていた学生は、仮設住宅へ移り住む人用に生活物資の提供に乗り出した。まずやったことは、避難所にいる一家族一家族まわって、必要なお皿や箸の数、その他その家族が必要とするものを聞いて回った。その情報を基に松本に帰ってきて、協力依頼のチラシを作り、新聞も活用しながら品物を集めた。その後、一家族毎に取りまとめ石巻へ運んだ。(写真参照)



正直に言って、「面倒くさいことをよくやるな～」と思った。全て学生が自分たちで取り組んだことである。この取組は、現地のニーズに基づいていることであり、一手間かけることで無駄が省けていることになる。なぜ、このようなことができるのだろうか。どこの学生もできることなのか。もし松本大学の学生しかできないこととするならば、普段の学びが非常時にどのような影響を及ぼすのか分析する価値はあるように思った。「学生はどう育ったか」とまだ振り返られる時ではないと思うが、普段の学びがあつてこそ、そのことが非常時にも活かされるものではないかと思う。

ここでは学生の取り組みを3点紹介するが、いずれも学生主体の取り組みであって、震災で学んだ財産は大変大きいものがある。

### (1) 地域での事例発表

東日本大震災から学ぶべきことは何か？というテーマで安曇野市豊科地域の「映画上映会」実行委員会が主催して研修会がおこなわれた。そこに、新聞記事で本学の東日本大震災災害支援プロジェクトの活動を知った実行委員会から、松本大学生の支援活動から学びたいという要望がプロジェ



クト代表者にあり、学生を派遣することになった。このように、学外で学生たちが災害支援ボランティア活動の体験を報告をする機会が多かった。このことは、地域の中で学生を鍛える機会にもなった。

開催日・場所	2011年12月17日
テーマ	地域での事例発表「震災から学ぶ」
主催	「映画上映会」実行委員会（安曇野市）
発表者	岡村壽秀（観光ホスピタリティ学科2年）
発表の内容	<p>(1) 活動の内容（がれきの撤去、サマーキャンプ、カウンセリング）</p> <p>(2) 活動の特徴（大街道小学校に限定した理由など）</p> <p>(3) 活動を通じて感じたこと</p> <p>①自分の小ささを痛感・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が被災地に出来る事の小ささ</li> </ul> <p>②自分の役割（個人）と社会的の役割（組織の1人として）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で出来る事、組織として出来る自分</li> </ul> <p>③一期一会の本当の意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単純な意味だけでなく深いところでの理解</li> <li>・繋がり、出会い、理解（認め合う）</li> </ul>

#### 発表者の感想 —岡村壽秀—

あるご婦人が、「私は年をとってしまって現地に行ってボランティア活動することはできない。ただ、私ができないことをしている方を応援することぐらいは私にもできるかなと考えている」という発言がありました。自分にとって大変勇気づけられるお言葉でした。そのような支援の形もあるのだと発見できた瞬間でした。



（ ↑ 発表のときに用いたパワーポイントの写真 ↑ ）

#### (2) 大学祭での問題提起 —シンポジウム—

平成23年10月22・23日、松本大学大学祭「第45回梓乃森祭」が開催された。今年の大学祭のテーマは、『Message ～今、君に伝えたい～』であった。このテーマを考えた学生たちの思いが大学祭のパンフレットの最初の頁に語られているので、ここに引用する。「2011年の大学祭のテーマは、『Message ～今、君に伝えたい～』です。今年は東日本大震災や栄村の震災もあり、被災者のために私たちが出来ることは何か？何をし、何を伝えていくのか、という意味がこのテーマに込められています。学生・教職員・そしてこの地域に住む皆さんにとって、今回の大学祭が『何か共に行動をしよう』という“きっかけ”になればと思います。最後になりましたが、被災地の復興を心よりお祈り申し上げます。」

大学祭の行事内容にも、梓乃森祭特別シンポジウムや東日本大震災生活支援フェア、被災地石巻

を紹介する石巻の特産品の販売会、松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトの活動報告、栄村写真展、栄村支援プロジェクトのトマトジュース販売など、学生たちの思いが形となって現れていた。特に、特別シンポジウムは多くの学生が災害支援に関わった中で、その支援活動は有効であったのか、もっと考えてできることはなかったのかなど自分たちの支援活動を評価し、今後活かす目的で大学祭実行委員会が企画した。

#### 特別シンポジウム

開催日 平成23年10月22日 13時30分～

主催 大学祭実行委員会

テーマ 「～災害と向き合うための Message～」

#### 第Ⅰ部「地域は災害とどう向き合うか」

パネラー	松本市副市長	坪田明男
	宮城クリニック医院長	宮城秀晃
	宮城県石巻市立大街道小学校校長	佐藤文昭
コーディネーター	本学総合経営学部長・プロジェクト活動リーダー	木村晴壽

#### 第Ⅱ部「災害と向き合う若者たち」

パネラーは、支援活動中、現地で知り合ったネットワークを活かした人選

早稲田大学社会科学部4年生・  
 一般社会法人復興応援団プロジェクトコーディネーター 大屋敷武瑠  
 早稲田大学大学院1年生・NPO法人TEDIC代表 門場優  
 千葉大学看護学部2年生・  
 被災者支援チームCANNU東北統括リーダー補佐 塚田祐子  
 本学スポーツ健康学科 3年 竹内貴裕  
 本学観光ホスピタリティ学科 1年 上條翔子  
 コーディネーター 短大部経営情報学科 2年 赤羽順子



#### パネラーの感想 —上條翔子—

2011年10月22日、梓乃森祭にて震災復興の特別シンポジウムに登壇させていただきました。シンポジウムは本学の学生や、被災地で活躍する他大学の学生とNPO法人の代表の

方をパネラーとして迎え、大学祭の局長でもあるコーディネーターの赤羽さんのもと、ボランティア活動の内容や活動を通して感じたことを語り合いました。シンポジウム終盤では大学祭のテーマである Message ～今、君に伝えたい～にならない「今までの活動を通して伝えたい言葉は何か」と、テーマが提示されメッセージを一人ずつキャンパスに書き、そこに込められた思いを話しました。周囲の被災地に向けての関心に温度差を感じるようになっていた私は“忘れないで”というメッセージを書き、「目で見えるのは復興して綺麗になった町並みだけど、震災はまだ終わっていない。震災が続いていることを忘れないで欲しい」という事と、「この日常は当たり前すぎてずっと続くのかと思いがちだけど、大きな力によって崩れてしまう、今を大切にしてほしい」という事を話しました。

今回のシンポジウムでは近い年齢の方と語らうことになり、自身の活動を振り返り整理をつける機会となったので私にとってもとてもいい経験になりました。(上條翔子)

### (3) 第1回つながる高・大交流フェスタの開催—地域づくり考房『ゆめ』の活動より—

「第1回 つながる高・大交流フェスタ」が、松本大学7号館コモンルームにて開催された。この会は、3.11東日本大震災から1年が経ち、学生たちが自ら、自分自身の暮らしや、価値・行動や地域活動を見つめなおし、今できることは何かなどを高校生とみんなで考える中で、今後の生活に活かしていく術を見出そうと、学生たちが企画、運営した。参加者は、高校生、高校関係者、大学生（卒業生等も含む）、大学関係者で、内訳は男性24名、女性50名で合計74名、高校生47名、大学生15名、教職員12名であった。

開催日	平成24年3月18日（日）12:30～16:00
テーマ	「忘れない！ 3・11 ～今、私たちにできることは～」
日程・内容	<p>I 開会式 ダンスDEオープニング</p> <p>II 全体会 1) 学長代行あいさつ 2) 被災地支援活動紹介（高校生・大学生の取組） エクセラン高等学校、辰野高等学校 松本大学 梶原悠（観光ホスピタリティ学科2年） 3) 被災地でのボランティア活動を通して（社会人） 炊き出し機動部隊 みらい 浅田修吉</p> <p>III 出会いを楽しむアイスブレイク テーマに添って</p> <p>IV グループワーク</p> <p>V まとめとふりかえり</p> <p>VI 閉会</p>

本企画は、本大学の地域づくり考房『ゆめ』が学生をバックアップして実現した。実施内容も『—「出会う」「つながる」「考える」—忘れない！3.11 ～今、私たちにできることは～』と銘打って報告書にまとめられている。また、この会に参加した全員が、今後もこのような高大交流フェスタを継続して行いたいとの思いであった。第2回、3回と継続することを期待する。

#### \* 参加した学生の感想 —伊東 梓（総合経営学部観光ホスピタリティ学科2年生）—

高校生との交流会ということで、あまり高校生とふれあう機会がないのでとても新鮮でした。ダンスを通して参加された皆さんが笑顔で楽しんでいるのを見て、「あぁ、人とふれあうのってやっぱりいいな」と心から思いました。また些細なことですが、こうして皆が今隣にいる人と笑顔で笑いあっていることが、3.11で被災された方々への元気や勇気に繋がっていくんじゃないかなと思います。交流会を通して、様々なことを学ばせていただきました。

#### —梶原 悠（人間健康学部健康栄養学科2年生）—

3月18日、行われた高大交流フェスタ。私は今回、“発想”という言葉キーワードに行いました。そこで私は会場が7号館1階であった為、その場所を生かし半円の窓に付いているブラインドを使って、プロジェクターでの動画やパワーポイントを映すモニターにしました。今ある事、出来る事を行う。それには何より“発想”することが大事だという事を表現したかったからです。そして実際に高校生たちとのワークショップでも、新しい考えが出てきたり、高校生のため勉強等で忙しい状況からでも“何かをしたい”という気持ちが発表され、まさに今回のテーマであった「～忘れない、3.11～」にあっていたと思えました。そして限りある中でも何かをしたい、そして出来るように考えていく発想。それを共有するためにも今回のようなフェスタをまた行いたいと思っています。

上記報告書「編集後記」より抜粋

発表する 梶原悠（健康栄養学科） 米山詩乃（健康栄養学科）



グループワーク後の発表の様子



## 5. 今後の活動と課題

東日本大震災（2011.3.11）の本学の支援活動について、宮城県石巻市に先遣隊を派遣し現地を最初に訪問してから約一年が過ぎる。被災地の復興は確実に進み、瓦礫の処理問題が行政レベルでニュースになっているものの、ただ街を歩いているだけでは、“想定外”の災害が起きたとは想像もつかないほど普通の風景になりつつあり、潜在化が懸念される所以である。

本プロジェクトでは、今回の活動を通じて松本大学方式といえる支援活動の仕方が明確化した。一つの地域を信頼関係を築きあげながら丸ごと支援するという形を作り上げたことは、本学が日常、地域と関わることから得たノウハウが十分活かされたものと判断できる。このことを基礎として、平成24年度も活動を続けていく計画である。

### （1）大街道小学校からの要請

大街道小学校の校長先生から今後の支援について依頼があったのは、平成23年度のカウンセリング支援が終盤に近づいた2月のことであった。平成24年度も今年と同様の心の支援活動を継続して欲しいとのこと、特に、サマーキャンプを実施して欲しいこと、さらに仮設住宅に移ってからの児童の状況を見るに、学習支援を再開して欲しいとのことなどの要望が伝えられた。

カウンセリングは、月2回、臨床心理士2名の教員が大街道小学校で活動してきた。平成23年7月から継続して行っている活動で、児童の相談、親の相談、教師の相談を受けている。定期的なアンケート調査にも介入し心のデータが積み上がりつつある。心のケアはこれからが重要で、これまでの継続的な関わりが今後大きな意味を成してくるにちがいない。

学習支援活動は、児童が仮設住宅へ移った昨年7月中止していた。しかし、児童が自宅に帰ってから自己学習時間が仮設住宅やアパートなどの仮住まいの関係上、時間が充分確保できなかったり、その環境になかったり、学力低下が懸念されていた。その現状を補う活動として、平成24年度は5月～7月の毎週木・金曜日の放課後、大街道小学校児童対象で学習支援を開始することになった。毎回5名～6名の学生が交代で、小学校に出向き児童の相手をする。9月～11月の毎週木・金曜日にも実施する予定である。この支援活動は、「これまでのボランティアを活かしてもう少し活動したい」というボランティア経験者の学生や教職希望の学生が参加しており、7月までの派遣はすでに決まっている。

当プロジェクトは、当初から長期の支援活動を行うことを基本方針として活動に着手しており、被災地にニーズがある限り、それに応えるように努めることは全員了解済みであった。また、今回のボランティア活動により、学生も大きく成長している点を鑑みると、ボランティア活動の継続は本学にとっても大きなメリットがあると考えられる。検討の結果、来年度も大街道小学校の復興支援活動を被災地のニーズに添った形で継続することで、松本大学方式はさらに確かなシステムとなることであろう。

今回、ボランティアを実施した経験から、石巻までの援助活動に出かけるためには旅費等、多額の活動資金の調達が必要不可欠であることを身にしみて感じていたため、早速、3月に入るや補助金確保に着手した。すでに、大半の補助金申請期間が終了しており、かろうじて文部科学省初等中等教育局の「緊急スクールカウンセラー等派遣事業」という補助金の申請に間に合い、補助金を受ける運びとなった。その後、木村学部長が担当部署へ交渉の結果、学習支援活動も合わせて補助金の対象として認められた。この補助金確保により、ボランティア継続に光りが差し込んだ。今後は、夏の「サマーキャンプ」実現に向けて、2年目のサマーキャンプのあり方や資金調達が課題となる。

## (2) 産業復興をどう支えることができるのか

夏(8月)までの瓦礫撤去等に代表される肉体を酷使する支援活動が一段落した時点で、産業復興をどう支えるかという課題に取りかかった。まず、2011年9月～12月は本格的な産業復興を模索する目的で、月1回ペースで現地調査を繰返し、商工会との主に水産物のマッチングを図ってきた。その過程で、学生からの希望もあり、10月の大学祭で被災地の特産物販売を実施した。学友会の学生、学生委員会の教職員が石巻へ同行し、石巻の市場やかまぼこ工場等を回り大学祭にて販売する特産物の仕入れを行った。当日は、石巻焼そば、さんま、笹かまぼこ、被災缶詰の販売を実現した。特に、被災缶詰はラベルがすべて剥がれていて、缶詰の中身が分からない状態であった。

そうした商品を現実に目にすることで、当プロジェクトは、一過性の商品販売ではなく、継続的に流通可能なシステムの構築を目指しており、大学祭での特産物販売を今後につなげたいと考えている。

その後、プロジェクトメンバーが被災地と中信地区の商社等との橋渡しを試みているが、今だに実現に至っていない。産業復興については、24年度の課題の一つとなっている。

## (3) 活動資金の調達

プロジェクト発足当初は、ボランティアとしての活動である以上、各自が必要な費用を負担するのが当然という考え方であった。しかし、一つの地域(大街道小学校・学校区)を丸ごと支援することが決定した段階で、活動資金の必要性が生じてきた。その時点で、学内での募金活動を開始し、各団体への寄付の依頼、災害支援対象の補助金申請にも着手、以後、支援活動と併行して活動資金調達のために奔走することになった。

振り返ってみると、松本大学教職員からの寄付や学生も自分たちのイベントの際に募金活動を実施したり、ゼミ活動での余剰金を活動資金へ回してくれた等、大学関係者より様々な形で活動資金確保に協力していただいた。松本大学同窓会や松本大学後援会からの資金提供、地域の各団体の寄付や地域の皆様からの個人的な寄付等、大勢の皆様の援助に支えられて平成23年度の災害支援活動を継続することができた。

平成24年2月12日(日)には、山根ゼミの企画で「フラ、イズ、アロハ チャリティーコンサート」が開催され、このコンサートの収益金を活動資金として寄付していただいた。この資金は、今年度活動資金の残金と同様に平成24年度の活動資金に充てさせていただくことになっている。

次年度の支援活動を実施するにあたり、資金ゼロでのスタートであった今年度と異なり、24年度は約百万円の資金(資料(2)平成23年度会計報告参照)を持つスタートとなるが、資金調達はやはり大きな課題である。来年度も継続して実施するカウンセリング活動と学習支援については、上記の通り文部科学省初等中等教育局の「緊急スクールカウンセラー・スクールカウンセラーに準ずる者派遣事業」の補助金を受けることが決定している。今年度補助金を頂いた、公益財団法人大和証券社会福祉財団、財団法人日本財団、財団法人JKA等には、再度、申請を行う予定であるが、一年を経過したことにより、災害時緊急補助金を取りやめている団体も多いと考えられる。さらに、今年度の経験から、補助金では賅えない出費もあると考えられるので、学内外を問わず、広く一般

からの活動資金調達に努めなければならない。特に、夏の大街道小学校の児童を招いてのサマーキャンプに向けて、資金調達は必至であり、平成24年度の重要課題となりそうである。

#### (4) 学生のボランティア活動をどのように評価するか

今回は、先に述べたように教職員も学生も「ボランティア」ということで、教職員は有休をとり活動に参加、学生は「欠席扱いとはしない」という教授会の申し合わせのもとで活動に参加した。学生は、今回のボランティア活動は一切単位にはならず、出席できなかった授業については、その担当教員の裁量に任せる形となった。担当教員各位が、いろいろな形で配慮してくれたことを感謝している。

今回のボランティア活動に参加した学生たちは、言葉で言い尽くせないような経験を積み、大勢の人々とかかわり、多くのことを学び取った。「4. 学生はどう育ったか」で学生の成長の一端を事例紹介という形で掲載した。こうした学生たちの活動をしっかりと評価したいが、現時点ではその良い方法が見あたらない。学生と行動を共にしていた教職員は、彼らの秘められた能力に驚かされたと言う。本当の意味での学生たちの評価が定まるまでに、今しばらく時間をおかなければならないのかもしれない。支援に入った地域でも、学生たちは非常に感謝されているが、被災地での本学学生の活動に対する評価も、またしかりである。

## 資料

## (1) 平成23年度活動報告

	派遣隊	日程				参加人数						活動内容	備考
		出発日	～	帰省日		教員	専門員	職員	学生	他	計		
1	先発隊	4/14	木	4/17	日	3	1		2	2	8	ボランティアセンター訪問、地域のニーズ調査、大街道小学校との打合せ、家屋の瓦礫撤去作業、小学生の遊び相手	宮城県石巻市出身の教員のツテを頼りに支援地を決定。支援方法は「顔の見える支援」を行う。
2	第1次	4/24	日	4/27	水	3	2		5	1	11	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去作業、小学生の遊び相手、次回の打合せ	大街道小学校及び校区を長期にわたり復興支援する地域限定・地域密着形の支援体型をとる。
3	第2次	4/26	火	4/30	土			1	6	1	8	大街道小学校区内の家屋の瓦礫出し・泥出し作業	第1次派遣隊の学生3名継続参加
4	第3次	4/29	金	5/2	月	3		1	5	1	10	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥だし作業、現地意向調査	
5	第4次	5/8	日	5/10	火	1	1				2	小学生カウンセリング、今後の打合せ	小学生対象カウンセリング開始
	第5次	5/9	月	5/12	木			1	4		5	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業	
6	第6次	5/11	水	5/14	土	2			5		7	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査、小学生・中学生・高校生への学習支援	今回から、夜間学習支援開始
7	第7次	5/22	日	5/24	火	1	2		4		7	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査・弾丸ツアー受入準備、小学生カウンセリング	事務職員のカウンセラー参加
8	第8次	5/24	火	5/25	水	3	1	1	16	2	23	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査、小学生カウンセリング	弾丸ツアー1、保健師、カウンセラー参加
9	第9次	5/25	水	5/26	木	1	2	1	26	2	32	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査、小学生カウンセリング	弾丸ツアー2、保健師、カウンセラー参加
10	第10次	5/26	木	5/27	金	5	1		24	2	32	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査(小学生招待について)、小学生カウンセリング	弾丸ツアー3、カウンセラー参加 小学生招待案の検討スタート
11	第11次	6/3	金	6/5	日	1	1				2	現地意向調査(小学生招待について・生活必需品)、小学生カウンセリング	
11	第12次	6/9	木	6/12	日	1	1				2	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査(小学生招待について・生活必需品)、小学生カウンセリング	
12	第13次	6/10	金	6/12	日			1	7	2	10	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・側溝泥出し作業、復興ひまわり植付	
13	第14次	6/15	水	6/17	金	1	1		4		6	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査(小学生招待について)、小学生カウンセリング	カウンセラー参加、14回派遣と合流
14	第15次	6/23	木	6/25	土		2				2	小学生カウンセリング	1名14派遣と合流
15	第16次	6/24	金	6/26	日	1	1		5	1	8	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、生活必需品配布(戸別)・小学生カウンセリング	
16	第17次	6/30	木	7/2	土		2				2	小学生カウンセリング	
参加者延べ人数						26	18	6	113	14	177		

	派遣隊	日程		参加人数					活動内容	備考	
		出発日	～ 帰省日	教員	専門員	職員	学生	他			計
17	第18次	7/1	金 7/3	日 4			6	3	13	大街道小学校区内の家屋の瓦礫撤去・泥出し作業、現地意向調査(小学生招待について)、物資支給	卒業生2名参加
18	第19次	7/7	木 7/8	金 1	1				2	小学生カウンセリング、現地意向調査(小学生招待について)、物資支給	
19	第20次	7/14	木 7/15	金 1	1				2	小学生カウンセリング、現地意向調査(小学生招待について)、物資支給	
20	第21次	8/28	日 8/30	火 1				1	2	小学生カウンセリング、現地意向調査(現状調査)	一般の方が参加
21	第22次	9/4	日 9/5	火 1	1				2	小学生カウンセリング、現地意向調査(今後の支援活動のニーズ調査)	10月に本学で実施する大学祭への参加意向調査
22	第23次	9/5	月 9/6	1	1				2	小学生カウンセリング、現地意向調査(今後の支援活動のニーズ調査)	10月に本学で実施する大学祭への参加意向調査
23	第24次	9/11	日 9/13	火 1					1	小学生カウンセリング	
24	第25次	9/29	木 9/30	金 2	1	1	5	1	10	産業復興支援の調査、大学祭での物資販売について小学生カウンセリング	大学祭の打合せ、シンポジウムと特産物の販売の可能性を調査
25	第26次	10/13	木 10/14	金 2	1	1	4	1	9	産業復興支援の調査、大学祭での物資販売について小学生カウンセリング	大学祭に災害支援シンポジウムと物産販売を実施する打ち合わせ。販売品目は石巻やきそば、災害缶詰、笹かまぼこ、秋刀魚の4品
26	第27次	10/27	木 10/29	土 1				1	2	小学生カウンセリング・大街道小学校運動会参加	
27	第28次	11/10	木 11/11	金 1		1		1	3	小学生カウンセリング・大街道小学校マラソン大会参加	
28	第29次	11/23	水 11/25	土 2	1				3	小学生カウンセリング・復興支援ニーズ調査	
29	第30次	12/1	木 12/2	金 1		1		1	3	小学生カウンセリング・復興支援ニーズ調査	
30	第31次	1/12	木 1/13	金 1				1	2	小学生カウンセリング・復興支援ニーズ調査	
31	第32次	2/9	木 2/10	金 1	1				2	小学生カウンセリング・復興支援ニーズ調査	
32	第33次	3/1	木 3/2	金 1					1	小学生カウンセリング・復興支援ニーズ調査・平成24年度活動打ち合わせ	
33	第34次	3/12	月 3/13	火 2	1		6		9	小学生カウンセリング・23年度最終活動報告会	
34	第35次	3/18	日 3/21	21	1	1	5		26	松本大学生企画「花いっぱい活動-花で癒しを-」(雄勝町)及び台湾エデン財団八福障害生活発展協会「台湾Jinがんばれ東北事業(台湾の歌コンサート)への協力	
35											
参加者延べ人数				19	16	2	28	31	94		
参加者延べ人数				45	34	8	141	45	271		





## (2) 平成23年度会計報告

## 平成23年度 松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト 会計報告

収入の部		支出の部	
<b>1. 松本大学関係団体寄付・関係者募金</b>		<b>1. 瓦礫撤去</b>	
教職員	830,621	旅費・交通費	ガソリン代他 10,952
学生	197,982	消耗品	瓦礫・泥だし作業用の道具・土のう 301,711
フラ・チャリティー	867,324		物資購入 72,211
松本大学関係団体(同窓会、後援会など)	2,608,686	食糧費	ボランティア参加者食事・水他 173,461
<b>松本大学関係機関・関係者寄付金合計</b>	<b>4,504,613</b>	その他	風呂代 24,500
			クリーニング代他 20,798
<b>2. 外部資金</b>		<b>瓦礫撤去に関わる支出合計</b>	<b>603,633</b>
中信地区各団体よりの寄付(注1)		<b>2. One Day 弾丸ツアー</b>	
ロータリー・ライオンズ倶楽部・商工会他	1,004,000	旅費・交通費	往復バス代+8/9ガソリン代 738,406
その他団体(同窓会・俳句会など)	455,647	消耗品	作業用具・作業ベスト等購入 310,805
<b>中信地区各団体よりの寄付金計</b>	<b>1,459,647</b>	食糧費	昼食・夕食・水他 121,054
		その他	修理代他 12,106
<b>補助金(注2)</b>		<b>「One Day 弾丸ツアー」活動支出合計</b>	<b>1,182,371</b>
大和証券福祉福祉事業団	500,000	<b>3. サマーキャンプ</b>	
財団法人 日本財団	1,000,000	旅費・交通費	往復バス代 平成交通 913,500
財団法人 JKA	2,995,000		本学バス運転委託料+ガソリン代 719,547
<b>補助金収入計</b>	<b>4,495,000</b>		バス運転手宿泊代・移動費 25,140
一般(個人)よりの支援金	127,905		宿泊費 浅間温泉2泊分 1,739,555
<b>外部資金合計</b>	<b>6,082,552</b>		活動日の移動費 21,900
		保険	学生・参加対象 98,525
<b>3. その他</b>		食糧費	昼食代 3回分 221,100
利息	211		飲料水 3日分 180,000
			送迎担当者食事代 70,520
		活動資金	送迎バス内での学生企画 16,385
			グループ別活動費用 49,594
			浅間温泉ミニ緑日費用 61,822
		その他	14,492
		<b>サマーキャンプに関わる支出合計</b>	<b>4,132,080</b>
<b>平成23年度収入合計</b>	<b>10,587,376</b>	<b>4. ガウンセリング等</b>	
		旅費・交通費	本学バス運転委託料 9回分 1,738,842
			ガソリン代他 80,247
			宿泊費 459,600
			JR・バス・タクシー 717,250
		食糧費	石巻での食事代 91,457
		その他	消耗品、植栽グッズ、リンゴ代等 43,979
		<b>ガウンセリング等に関わる支出合計</b>	<b>3,131,375</b>
		<b>5. その他(シンポジウム、被災地特産品販売等)</b>	
			大学祭、シンポジウム他 58,983
			栄村支援 39,759
			来年度活動の準備として(アパート契約他) 273,360
		<b>その他の支出合計</b>	<b>372,102</b>
		<b>平成23年度支出合計</b>	<b>9,421,561</b>
		来年度への繰越	1,165,815
<b>合計</b>	<b>10,587,376</b>	<b>合計</b>	<b>10,587,376</b>

注1: 中信地区各団体よりの寄付金は主にサマーキャンプ実施の際に充当。

注2: 大和証券福祉福祉事業団の補助金は「One Day 弾丸ツアー」の活動に充当。財団法人日本財団の補助金はサマーキャンプ実施の際に充当。財団法人JKAの補助金はカウンセリング活動に充当。

皆様のご支援を心より感謝いたします。

松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト

## (3) 新聞掲載一覧

掲載日	掲載紙	タイトル	対象	氏名1	学科	学年	氏名2	学科	学年	氏名3	学科	学年	備考
2011/4/12 (水)	タウン情報	今、私たちはなにを 東日本大震災 あなたのカルカッタ	教員	尻無浜 博幸									
2011/4/16 (土)	信濃毎日	松本大の有志 宮城県石巻市を訪問	教員・学生	尻無浜 博幸			木村 晴壽			高橋 遼宇	K	3	
2011/4/16 (土)	中日	被災地へ先遣隊出発	教員・学生	木村 晴壽			佐藤 雅仁	K	4	高橋 遼宇	K	3	
2011/4/16 (土)	市民タイムス	被災地の継続支援 横柴	学生	佐藤 雅仁	K	4							
2011/4/18 (月)	信濃毎日	松本大の石巻市支援作業に同行	教員・学生	尻無浜 博幸			佐藤 雅仁	K	4	高橋 遼宇	K	3	
2011/4/19 (火)	中日	被災地支援連休前も 松本大生ら副市長に報告	教員・学生	中山 文子			高橋 遼宇	K	3				
2011/4/19 (火)	市民タイムス	被災地支援へ現状確認 松本大の先発隊市に報告	教員・学生	木村 晴壽			高橋 遼宇	K	3				
2011/5/8 (日)	信濃毎日	震災後の大型連休 癒しや健康を求めて											
2011/5/23 (月)	信濃毎日	「全国的震災支援」手探り 「県民本部」活動開始1ヵ月											
2011/6/1 (水)	教育学徒	松本大の被災地支援 特定場所で長期的に活動	教員	尻無浜 博幸									
2011/6/2 (木)	タウン情報	ソニタクラブズ松本大×才教学園 被災地へ支援物資を	学生	若林 みどり	T	2							
2011/6/7 (水)	タウン情報	今、私たちはなにを 東日本大震災 視察あめて支援を	学生	梨子田 純輝	T	2							
2011/6/11 (土)	中日	被災地支援物資 夏服や生活用品 松本大生ら募る	学生	上条 翔子		1							
2011/6/15 (水)	信濃毎日	地域再生 支援島長く 対応大胆に	教員	白戸 洋									
2011/6/17 (金)	信濃毎日	松本大の学生グループ 栄村の農産物販売	学生	梶原 悠	N	2							
2011/6/23 (水)	タウン情報	地域丸ごと支援に汗 松本大の教員と学生	教員・学生	木村 晴壽			古林 康江			横川 卓也		4	他学生3名
2011/6/25 (土)	信濃毎日	松本大生 石巻市へ日用品や夏物衣料	学生	上条 翔子		1							
2011/7/1 (金)	シタックス社内報	本報員の運転手・ピストキが松本大学の被災地ボランティア活動を支援	職員	小林 利光			清水 光夫						
2011/7/27 (水)	信濃毎日	松本大講師 児童の心のケア 宮城・石巻	教員	中山 文子									
2011/7/27 (水)	信濃毎日	宮城・福島の子どもたち招待 安曇野キャンプ満喫											
2011/7/28 (木)	タウン情報	松本の夏をプレゼン ト 石巻の小学生133人招く	教員・学生	木村 晴壽			中村 謙太	T	4	市川 ふみ	T	2	
2011/8/3 (水)	信濃毎日	松本大の有志は石巻の170人招待											
2011/8/13 (土)	タウン情報	松本の夏に”元気の絆”	教員・学生	木村 晴壽			北原 保奈美	T	4				
2011/8/18 (水)	市民タイムス	研究室訪問 心のケア	教員	中山 文子									
2011/8/19 (金)	信濃毎日	原発事故処理シニアの手で 元技術者らの「行動隊」県内5人志願	教員	水橋 文雄									
2011/9/1 (水)	タウン情報	ヒマワリ見て元気に 新村で松本大が祭り	学生										
2011/9/2 (金)	市民タイムス	色鮮やかヒマワリ見頃 新村の畑 3、4日に催し	学生										
2011/9/7 (水)	市民タイムス	ボランティア助成金贈る 大和証券補給団 松本大に50万円	教員	白戸 洋									
2011/9/13 (水)	信濃毎日	震災から半年 変わるニーズ 県内新たな支援策構築	教員	尻無浜 博幸									
2011/10/20 (水)	中日	松本大生 被災地でボランティア活動 学祭で報告	学生	赤羽 順子	J	2							

